



選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

ぼくのお母さん

今野 琉輝 亜

ぼくは三人兄弟の長男です。いつも弟たちの世話をしています。何かあった時はぼくの責任です。

「お兄ちゃんでしょ、もっと兄ちゃんらしくしなさい。」

いつも言われます。こんなのがイヤで仕方ありませんでした。そんな時、お母さんにぼくにはお姉さんがいたことを聞きました。

二〇〇二年、お母さんは四年間待ち望んでいた妊しんをしました。にんしんが分かった時何度も先生に確にんしたそうです。

そのうち、つわりというものが始まり何もたべていなくても吐いたり一日中気分が悪かったり大変な時をすごしました。そしてにんしん四ヵ月ころになるとつわりもおさまって、心音も確認ができました。安心していたので、五ヵ月に入って初めての超音波検査の前の日、お母さんは何かイヤな予感がしました。検査当日先生がおなかに機械を当てているとそのイヤな予感的中してしまったのです。先生はだまったまま何か本で調べていました。そしたら先生から、

「おなかの中の赤ちゃんはさい帯ヘルニアという病気にかかっています。この病院では例もなくたいしよできない他の大きな病院にいつてください。」

お母さんはその時、どういう事かも分からずどうしていいかも分からず、ただ立ち動けなくなったそうです。

次の日、大きな大学病院をしようかいされ父と二人で行きました。検査の結果、やっぱりさい帯ヘルニアでした。さい帯ヘルニアとは、ふつうのヘルニアと違い、お母さんと赤ちゃんをつなぐへそのおというものに赤ちゃん

んの体の中の腸などのぞう器が全てくっついて、お腹の中で、赤ちゃんが育っても赤ちゃんのお腹が閉じない病

気です。さい帯ヘルニアという病気は、他の病気もへい発するらしく、ダウン症の病気に、七十パーセントの確率でかかるそうです。そして一万人から二万人に一人しかない事、大きな病院でも過去に三例しかなくその三例も軽いもので今回のように巨大なものではないそうで、手じゅつをしても、生きられる確率は、三十パーセントにもみたくないそうです。両親はどうする事もできず泣き続けました。周囲から産む事も反対され、中絶するよう

に言われたそうです。お母さんはどんな子であれ赤ちゃんの生命にかけ、産む事にしました。それでも、周囲は

言葉をかけていいか分からずただだまって話を聞くしかできませんでした。

入院している間、やはりめずらしい病気だったために色々な国の医者がみに来ていました。最初はみんなに観察されているようで、イヤだった母もこれから先、世界中の子供のために医りようがよくなるのならと協力する事にしたそうです。そんな入院生活が続いて、にんしん八カ月になった十一月八日、とっぜん破水してしまい、きんきゅうで産むことになりました。

赤ちゃんは無事に生まれ、体重二七五〇グラムでした。これがぼくのお姉ちゃんです。無事に生まれましたが、これからが大変です。まだ八カ月という事で肺や心ぞうがちゃんと機能していなく、生まれてすぐにNICUという赤ちゃんの集中ちりょう室に入りました。ヘルニアも思ってた以上大きいらしく、これは自然におなかにおさまってくれるのを待つしかなかったそうです。

一カ月がたちだいたいがおなかに入ったころおなかを

ぬう手じゅつと心ぞうの手じゅつをしました。経過は順調でみんなが安心したところに事態が急変しました。感せん症にかかったのです。交かん輸血という体中の血液を時間をかけ全て入れかえるというものをしたそうです。

が、結局、一月十九日朝四時五分に息をひきとりました。わずか二カ月半たらずの命でした。お母さんはそれでも自分の子供として生まれてきてくれた事に感謝していると言っていました。もしかして、運命が少しでも変わっていたらぼくや弟たちも生まれてなかったかもしれない。お姉ちゃんが生きていたら…と考える事もあるけど、お姉ちゃんはきつとぼく達を見守ってくれていると思います。

話し終わった後、おかあさんがぼくに

「私のところに産まれてきてありがとう。あなた達は私の大事な宝物だよ。」

と言いました。この言葉を聞き、ぼくはなみだが止まりませんでした。弟たちとケンカしたり、おこられたりした時、ぼくはちがう家が良かったなんて思うこともあり

ました。いつもおこるお母さんも、すぐおこっているも心の中ではぼくたちが大切に宝物だと思っていると知った時は、お母さんにとても申しわけなくて悲しくて仕方ありませんでした。それと同時に、大変な思いをしてきたお母さんはすぐくえらいし、ぼくの中でだれよりもそんけいできる人だと思いました。うちのお母さん、そしてお姉ちゃんは世界一です。最後にお姉ちゃんに一言いいたいです。

「ぼくが弟たちとお母さんをしっかりと守るから安心して天国から見えてね。今までお兄ちゃんがいるのがイヤだなんて言っておめんない。でも、お姉ちゃんに会って話してみたり一緒に遊んでみたかったな。」

これから先、もっと大変なことがあるとは思っています。

弟達とのケンカもお母さんにおこられる事もきつといっぱいあります。でも、そのたびに生きたくても生きられなかったお姉ちゃんの事、もっと辛い思いをしてきたお母さんの出来事を思いだし、がんばりたいです。

ぼくもお母さんの子供でよかった。

産んでくれてありがとう。
お母さんの子で幸せだよ。